

24年前に描かれた“名前のない孤独”が
いまもあなたに問いかける

「物語」

「ぼたん」と水滴が落ちて波紋が広がる……。そんなふうに世界が震えて生き生きしてくる特別な瞬間を表現したい。高い理想を抱いて絵を描いてきた画家 芳美（板谷由夏）は挫折して自分を見失い、今は電車の中で盗みを働く日々を送っていた。そんな彼女の前に現れた謎の青年 哲史（水橋研二）。「夜の町を走って逃げるあんたの姿、カッコよかった。流れ星みたいで」。哲史は人懐っこい笑みを浮かべて芳美につきまといだす。

「解説」

2002年に制作された『みつかるまで』は、映画美術学校高等科の実習作品として生まれた映画。

完成当時、中編の劇場ロードショー公開という形式が浸透していなかったため、限られた機会の中でのみ上映されてきた。

24年の時を経たいま、本作はようやく劇場で観客と向き合う機会を得た。それは「発掘」や「再評価」という言葉以上に、時代が追いついた結果だと言えるだろう。監督・常本琢招は、商業映画と

インディペンデント作品を往還しながら、常に「居場所のない存在」を描いてきた作家である。過剰さと繊細さ、煽情性と孤独感が同居するその作風は、

本作において、最も静かなかたちで結実している。主人公 芳美を演じる板谷由夏は、若さの中に危うさと覚悟を同時に宿している。挑戦的な視線の奥には、誰にも頼れない不安があり、それでも前を向こうとする意志が、静かに伝わってくる。

水橋研二演じる哲史は、強さは程遠い存在だ。人懐っこい笑顔の裏に隠された脆さが、見る者の心を思わず緩めてしまう。二人は恋人にならない。救い合うわけでもない。

それでも、同じ時間を過ごし、同じ夜を歩くことで、ひとりであることの重さが、ほんの少しだけ変わっていく。

板谷由夏の挑戦的な眼差しと、水橋研二の脆さを孕んだ佇まい。

「男らしさ」「女らしさ」から自由になった身体表現が、現代における新しい関係性のかたちを、静かに問いかける。



20数年前、監督と、夜中まで熱く話をし、この作品に取り組んでいた20代の私の情熱はまだ今の私の中に居るだろうか、と考えました。それが残っている限りこの仕事を続けたい、そんな思いが浮かびます。経験に感謝します。ありがとうございました。

——板谷由夏（俳優）

みつかるまで
UNTIL IT'S FOUND

監督：常本琢招
2002年 | 16mm→DCP | 映画美術学校作品 | 45分

3/13(金)~26(木) ロードショー

料金：一般 1,500円（各種割引あり） ◎上映時間は、HPやSNSでご確認ください

神保町駅・御茶ノ水駅

Gシネマリス

03-6803-3214 cinemalice.theater

